

「がんを知り生きる！」 講師 川端一嘉 先生



《先生のプロフィール》

昭和26年11月生まれ(53歳)

昭和52年 東京医科歯科大学医学部卒業

同年4月 東京医科歯科大学耳鼻咽喉科教室入局

昭和53年10月 金沢医科大学耳鼻咽喉科へ派遣

昭和54年10月 都立駒込病院耳鼻咽喉科へ勤務

昭和56年10月 癌研究会付属病院頭頸科へ勤務

以後、医長、副部長を経て平成17年5月より
癌研究会付属有明病院頭頸科部長として現在に至る

講演概要

「頭頸部がんについて」 癌研究会付属有明病院 頭頸科 川端一嘉

1. 頭頸部がんとは？

聞きなれない癌(がん)と思いますが、舌の癌など口の中にできる癌や、のどの中にできる癌、鼻や耳に出来る癌、甲状腺など頸(くび)に出来る癌など、脳より下で鎖骨より上の部分に出来る癌を言います。

2. 頻度は？

肺や胃、大腸などに出来る癌などに比べてずっと少なくなじみの薄いものと思いますが、日本では、癌全体のなかで、5 - 8%位に見られます。

3. どんな例があるか？

最近では、元二子山親方や勝新太郎さん、萬屋錦之介さんなどが、頭頸部がんであったという報道がありました。石原裕次郎さんも舌がんを治したそうです。

《裏面に続く》

旧くは、池田元総理が下咽頭がんで亡くなっています。

また頸には、たくさんのリンパ腺（正確にはリンパ節といいます）があり、ここに他の部分に生じた癌が飛んできて（転移）、腫れることがあります。この場合、もとの部位がわからないことがあり、原発不明癌と呼ばれます。いかりや長介さんが、この状況であったと報道されていました。

このように、頭頸部がんは決して稀(まれ)なものではありません。

4 . 頭頸部がんの特徴は？

頭頸部は、話をしたり、ものを食べたり、匂いをかいだり、音を聞いたりなど日常の生活に非常に重要な役割をしている器官の集まりです。ここに出来た癌を治療するとこれらの機能を犠牲にしなければならない事が少なくありません。

たとえば喉頭がんでは、声を失う事があり、舌がんでは、ものを嚙んだり、飲み込んだりする機能が失われることがあります。これが胃や腸の治療と大きく異なる点です。

5 . 頭頸部がんになると必ずこれらの重要な機能が障害される？

これらの障害の程度は腫瘍が大きくなればなるほど大きくなります。しかし小さいうちに癌がわかれば、ほとんど障害を残さず治ることができます。

このためには、やはり早期発見と予防が大切です。

今回は、このような特徴をもつ頭頸部がんのご紹介と治療の現状、そして早期発見のためにどのようなことをすればよいか等のお話をしたいと思います。

以 上